森があり 樹が育ち そして

Imagin 21

「イマジン21」第12号／平成17年12月1日発行（年2回 春秋発行）

リレー連載 世界遺産 奈良歴史散歩 ③

Essay 印刷文化逍遥 ⑫

なら まちかど探索 金魚が泳ぐ城下町（大和郡山市）

報告 JP2005 情報・印刷産業展を行く

訪問 地域とボランティア NPO法人キャリアサポートセンター奈良

大和の伝統工芸 奈良晒

付録 印刷物ができるまで

「文字・活字文化振興法」が７月29日公布され、10月27日が文字・活字文化の日となりました。この事をご存知の方は、少ないように思っておりますが、最近の文字離れ・活字離れには、私たち業界の者にとどまらず嬉しい知らせです。

この法律の「目的」には、『文字・活字文化が、人類が長い歴史の中で蓄積してきた知識及び知恵の継承及び向上、豊かな人間性の涵養並びに健全な民主主義の発達に欠くことのできないものであることにかんがみ、文字・活字文化の振興に関する基本理念を定め、並びに国及び地方公共団体の責務を明らかにするとともに、文字・活字文化の振興に関する必要な事項を定めることにより、我が国における文字・活字文化の振興に関する施策の総合的な推進を図り、もって知的で心豊かな国民生活及び活力ある社会の実現に寄与することを目的とする。』とあります。

「文字・活字文化」を印刷業が支えてきたという誇りを忘れず、更なる大きな力となりえますようにいたしたいと思っております。

代表取締役社長　近東　宏光

Imagin21

わたしたちができる環境づくり

自然との共存を図りながら
限りある資源を大切に使い環境を守っていく―
私たちは時代に役立つ企業であり続けたいと考えます

JQA-EM2283
本社・本社工場

編集／制作／発行
共同精版印刷株式会社
本　　社：〒630-8013 奈良市三条大路２丁目２-６
TEL 0742-33-1221　FAX 0742-33-7035
大阪支社：〒542-0082 大阪市中央区島之内１丁目12-3
TEL 06-6271-7951　FAX 06-6271-7954
東京支社：〒116-0014 東京都荒川区東日暮里５丁目６-４
TEL 03-3802-4741　FAX 03-3802-4740

本誌に対するご感想、ご要望などがございましたら、上記本社内「イマジン21」編集部までお寄せください。

世界遺産 奈良歴史散歩

リレー連載

3 松明調進と中世の名張盆地

写真：東大寺図書館　野村 輝男

松明調進と中世の名張盆地

【松明調進と名張盆地】

東大寺の年中行事のなかで、もっともよく知られている行事の一つが二月堂の修二会（お水取り）である。春を迎える火の祭典のクライマックスに回廊上で振られる大松明はまことに印象的である。修二会は遠く奈良時代からおこなわれてきているが、この火の祭典でもちいられている大松明の芯の松明木は奈良から山一つ越えた名張市赤目町一ノ井の松明講から毎年寄進されている。伝承によると、一ノ井に鎌倉時代初期に住んでいた道観という人が、重源上人の東大寺再建のよびかけに応じて大木を寄進したのが松明調進のはじまりとされている。一方文献史料のうえで修二会の松明にふれているのは、鎌倉前期の宝治三年（一二四九）三月聖玄寄進状に「二月堂　六段　二七ヶ夜行法続松十二百把料田也」とあるのが最初である。僧聖玄が伊賀国名張郡（現三重県名張市）矢川村の水田六段を「二七ヶ夜行法」（修二会）の「続松」（松明）の費用にあてるべく二月堂に寄進するというものである。そしてこれ以後今にいたるまで、名張盆地からの松明調進がつづいている。

お水取り松明

【黒田庄の成立と展開】

では、なぜ松明が名張盆地から調進されるようになったのであろうか。これについては、黒田庄という東大寺領庄園の存在がふかくかかわっている。東大寺の歴史をふりかえってみると、八世紀の律令国家体制のもと、てあつい国家保護をうけて成立したが、摂関政治・院政へと時代が推移し、律令国家が形骸化するなかで、庇護者をうしない、弱体化がすすむ。しかし、東大寺は手をこまねいていたのではなく、各地に庄園を確保し、それを経済的基盤にすることで、寺勢の維持・発展をはかる体制へのきりかえを積極的にすすめていく。

東大寺は京都の教王護国寺（東寺）とならんで、膨大な中世文書を保存している寺として知られているが、庄園にかかわる文書がそのうちでも大きな比重をしめている。庄園の獲得・維持が中世の東大寺にとって、寺院経済をささえていくうえで大事な意味をもっていたことを物語っている。そして、庄園関係文書のうちでも文書点数のおおい庄園の一つが名張郡所在の黒田庄である。この庄園が東大寺にとってかけがえのない重要な庄園であったことをしめす。

黒田庄の東大寺にとっての重要性はこの庄が位置する名張盆地の重要性にかかわる。一〇世紀の摂関政治期以降、東大寺は本拠地の大和盆地では摂関藤原氏の氏寺興福寺におされておおきな庄園を設定できる力はもっていない。しかし、安定した収入をうることのできる庄園を寺のちかくに確保することは寺にとっては必要であり、そこで東大寺が目をつけたのは奈良から比較的ちかい伊賀国であった。東大寺はここに庄園を設定することにおおきな力をそそぎ、結局、北伊賀に玉滝庄、南伊賀（名張盆地）に黒田庄という庄園を確保すること成功する。このうち黒田庄は全盛期には、田地面積は三〇〇町をこえ、その広がりは名張盆地全域におよぶという巨大庄園に成長している。

もちろん最初からこのようにおおきな庄園であったのではない。奈良時代のころ、東大寺は大仏殿など堂舎の建設・維持に必要な材木を採取するために、板蝿杣という杣山を大和の東山中にもっており、その広がりは伊賀国との国境にまでおよんでいた。そしてこの杣で働く杣工たちは、その居住地を杣の麓に位置する、国境を越えた伊賀国名張郡の黒田の地にもとめていた。

板蝿杣は木が伐りつくされるなかで、その役割はおえるが、杣工の居住地としての黒田は残っている。一〇世紀の摂関期頃になると、東大寺はこの小さな居住地に目をつけ、黒田本庄と名付け、ここを拠点に名張盆地内の村々を支配下に吸収しようとする動きを開始する。この東大寺による名張盆地一円の庄園化の過程は以後平安時代末の一二世紀末まで二〇〇年以上の長きにわたり続く。その間、東大寺は名張の村々の武士や農民、あるいは伊賀国の官人や京都から派遣されてくる官人、さらには伊勢神宮や興福寺といった大寺社などと争いながら名張盆地全域を支配下におくことをめざす。そして本来の杣工居住地である黒田本庄、あらたに東大寺が獲得した地である黒田出作新庄、あわせて全体として黒田庄とよばれる巨大な東大寺領庄園の確立に成功する。この黒田庄確立過程は、第二次世界大戦後の日本中世史研究をリードしたといわれている石母田正氏

の名著『中世的世界の形成』のなかで、いきいきと描かれており、日本に中世庄園成立のあり方をしめす一つの典型として著名である。

【重源上人と松明調進】

修二会の松明は黒田新庄にふくまれる矢川から調進されている。調進の由来については伝承の語るところと文献ののべるところでは相違がある。しかし、伝承とはいえ、松明調進のきっかけに重源上人が登場しているのは興味ふかい。東大寺支配下の黒田庄が確立した姿をあらわす一二世紀末は源氏と平氏という二つの勢力がぶつかりあい、そのなかから鎌倉幕府が生まれるという政治的な激動期であり、治承四年（一一八〇）には平重衡の奈良焼き討ちがなされ、そのなかで大仏殿などの伽藍のおおくが炎上・焼失するという、東大寺にとっても存続の危機に直面した時期でもあった。二月堂は類焼をまぬがれたものの、修二会もその存続があやぶまれるような状況におかれていたようである。

しかし、このような東大寺が直面した危機は、重源上人が主導する東大寺復興の巨大な運動によりのりこえられていく。重源は勧進聖として卓越した組織力をもって民衆を組織し、さらには頼朝ら武士勢力をもまきこみながら、それらの力を結集して、大仏再建をはじめとした復興事業をなしとげていく。重源のもとめに応じた道観の寄進が松明木調進のはじまりとするのは、事実ではなかろう。しかし、そのように結びつけられるところに、重源の東大寺復興というよびかけが、名張ないしは伊賀という地域の民衆たちにおおきな共感をよびおこし、人々がそれぞれの仕方で、そのよびかけに応じていったことの一つのあらわれとみることができる。

重源上人像

【修二会と名張盆地】

修二会についても、一旦は存続の危機にさらされるが、さまざまな地域のさまざまな人々により支えられながら、あらためてその体制がととのえられていった。その一つのあらわれが、僧聖玄が黒田新庄内の水田を松明木の調達料として二月堂に寄進したことである。この寄進がなされたときには重源はすでに世を去っているものの、重源がつくりだした東大寺復興の波のなかでの体制整備の一環であるとみてよい。聖玄は東大寺の僧であり、当時黒田新庄の「庄預」つまり、新庄の管理責任者でもあった。このとき聖玄は自分が新庄内にもっていた私領の水田を大仏御仏聖闕如料田・二月堂・浄土堂にそれぞれ寄進している。東大寺諸堂舎の運営を安定化し、さらには東大寺の庄園として確立してから約半世紀経過している黒田庄をより密接に東大寺に結びつけていくためになされた寄進であろう。

この寄進で名張地域ははっきり修二会と結びつく。以後当庄は南北朝・室町・戦国期を通して東大寺領であり続ける。今のように、赤目の人々が松明講をつくり、その講が自発的に松明木を寄進するようになるのは、江戸時代初期といわれる。となれば、中世を通じて黒田新庄矢川村の松明料田はその機能をはたし続けたか、そうでなくても村の人々による自発的な松明木調進がなされて、それが近世の松明講に引きつがれていったとみるべきであろう。

修二会の諸行事のなかで有名なものの一つに、期間中の二日間だけおこなわれている過去帳の読み上げがある。東大寺とくに二月堂にゆかりの深い人々を奈良時代以来書きついできているものを読みあげるのであるが、そのなかに女人禁制の法会のなかであるにもかかわらず、「青衣之女人」という名前が記されていることはよく知られている。さまざまな推測がなされているその由来についてはさておくとして、この「青衣之女人」のすこしあとに、「田地寄進　聖玄法印」と記されている。聖玄のはたした役割は黒田庄という巨大庄園さらには名張盆地をふかく東大寺に結びつけるうえでおおきかったのであり、それゆえに過去帳に記されているのである。昭和の始め一九二〇年代までは、松明は一ノ井から東大寺まで、笠間峠を抜け東山中を通る四〇キロの道を地元の人々の手で一日がかりで運ばれていた。この道は中世において黒田庄と東大寺を結ぶ道そのものでもあった。中世東大寺と名張の強い結びつきはそのような形で残っていたともいえる。

丸山　幸彦［まるやま　ゆきひこ］

1939年　長野県生まれ。
京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学　博士（文学）。現在、奈良大学文学部史学科教授。日本中世史・庄園史を専門分野としている。日本史研究会、史学研究会に所属。
著書に『古代東大寺庄園の研究』（渓水社）
『川と人間　―吉野川流域史―』（渓水社）
『日本庄園史料・阿波国・讃岐国部』
（吉川弘文館）などがある。

印刷文化逍遥 12

嘉瀬井 整夫

Tadao Kasei

1934年京都市に生まれる。
1949年より同94年まで印刷産業に従事。
奈良県立短期大学（現奈良県立大学）卒業。
主著「井伏鱒二私論」「井伏鱒二とその時代」
「奈良大和路文学散歩」ほか。
文芸評論家。

印刷文化の世界も、探れば探るほど深く、かつまた広範囲に亘っている。その歴史は一国にとどまらず、海を越え、国境を越えて連なっていることはいうまでもない。

今回は、日本のキリシタン司祭が、四百年前にラテン語で詩を書き、印刷までしていたという事実を紹介したい。

例によって奈良町の古本屋をうろついていたら、一冊のめずらしい本と出会った。それは原田裕司という人が書いた『キリシタン司祭後藤ミゲルのラテン語の詩とその印刷者税所ミゲルをめぐって』という、長いタイトルの本であるが、印刷を生業としてきた者にとっては、黙って見過ごすことはできなかった。

版元は近代文芸社という、どちらかというと自費出版が中心のところであるが、版型は四六判、ページ数は百ページあまりの薄い出来具合のものである。

発行年は一九九八・五で、約七年程以前のもの。著者は一九五四年生まれで、当時大阪大学言語文化部の講師であった。

興味を抱いたのは、日本人のキリシタン司祭がマニラでラテン語の詩作をし、それを印刷したという事実である。この後藤ミゲルという司祭は、よほどラテン語が出来たのであろう、詩を作るまでになっていたのは全くの驚異である。

また、それを印刷したという税所ミゲルも、すばらしい印刷技術を保持していた人であることがわかる。年代は十七世紀初頭ということであるが、こんな時代にもかかわらず、すでに日本人が書いたラテン語の詩が堂々と印刷されていたのである。

これにつき、著者は「もしわれわれのラテン詩人「ミゲル・ゴトー」が後藤宗印の息子後藤ミゲルであるならば、ゴトーは自作のラテン語の詩が載ったイロコ語の書物が出版される一六二一年の三年前、すなわち一六一八年に司祭に叙階され同年日本に帰ったことになる。五野井氏は、後藤ミゲルが一六一八年以前かその前後にフィリピンに渡航したことを示唆する史料はないとしているが、キリスト教義書をフィリピンの現地人に推奨する「日本人司祭ミゲル・ゴトーのラテン語の詩」を掲載した書物が一六二一年にマニラで出版されたという事実は、ゴトーのフィリピン滞在を裏付ける有力な証拠ではないのか。」とのべている。

彼らはキリスト教の伝導に身命を賭していたことはいうまでもないが、いわば印刷術は布教における不可欠の道具であったわけである。もちろん、今日のように鮮明な印刷物が出来ないことは当然であるが、ともかく一度に多くの人々に印刷物を配布するには、やはり「印刷」という手段がもっとも重要なものではなかっただろうか。

もう一つは、彼らの信じてやまないキリスト教が、必ずしも現地人には受け入れられたとは考えられず、むしろ異教の徒として、宣教師たちを白眼視し、迫害を加えたのではなかったか。

してみると、キリスト教を広げる人たちには想像以上の苦難があり、迫害があったのである。しかし、そうした苦難をはね返し、ひたすら耐え忍んで一心に布教にはげむ姿は、何ものにも代えがたい尊いものがある。

それでは、一体後藤ミゲルがどのようにしてラテン語を学んだのか、それについて引用してみよう。「後藤ミゲルが入学した「司教の神学院」とは一六〇一年にセルケイラ司教が長崎の岬の教会に設立した教区大神学校のことである。それに先立って彼が卒業したセミナリヨとは、合併後一五九一年から九五年まで島原半島の八良尾にあり、以後有家、天草、長崎、有馬と移転せざるを得なかったイエズス会の小神学校のことである。八良尾時代以降のセミナリヨおよび一六〇一年から一六一四年まで長崎の岬の教会に存続した教区大神学校においてどのようなラテン語教育が行われていたのか。それを探ることは、数年後追放先のマニラにおいて見事なラテン語の詩を書くこととなる後藤ミゲルを理解するうえで極めて重要である。」これをみる限り、学校といっても要するにキリスト教の教義が中心になったラテン語であり、学ぶことも当然キリスト教の教義であったことはいうまでもない。

後藤はそうした中で、詩を書くことを覚え、次々と詩作をしていったのである。つぎに、その詩の一部を掲げる。

この書を推奨する
寸詩
日本人司祭ミゲル・ゴトー師作

金色の陽光がその輝きによって真っ暗な闇を追い払い

優しく万物をその熱で暖めるように、
この書物は人々の心を黒い霧から解き放ち
神々しい火によって凍えた心を動かしめる。
ゆえにイロコの人々よ、もし汝らが光を見たいと望み
冷めかけた胸を炎で上がらせようと願うなら、
この書を手に取り昼夜を分かたず読むがよい。
これこそ汝らにとって永遠の光となり火となるであろう。

内容的にはとくに取り立てていうほどのものはないといってあるが、しかし原語をみると一応脚韻も踏んであり、誰にでも書けるというものではなかった。

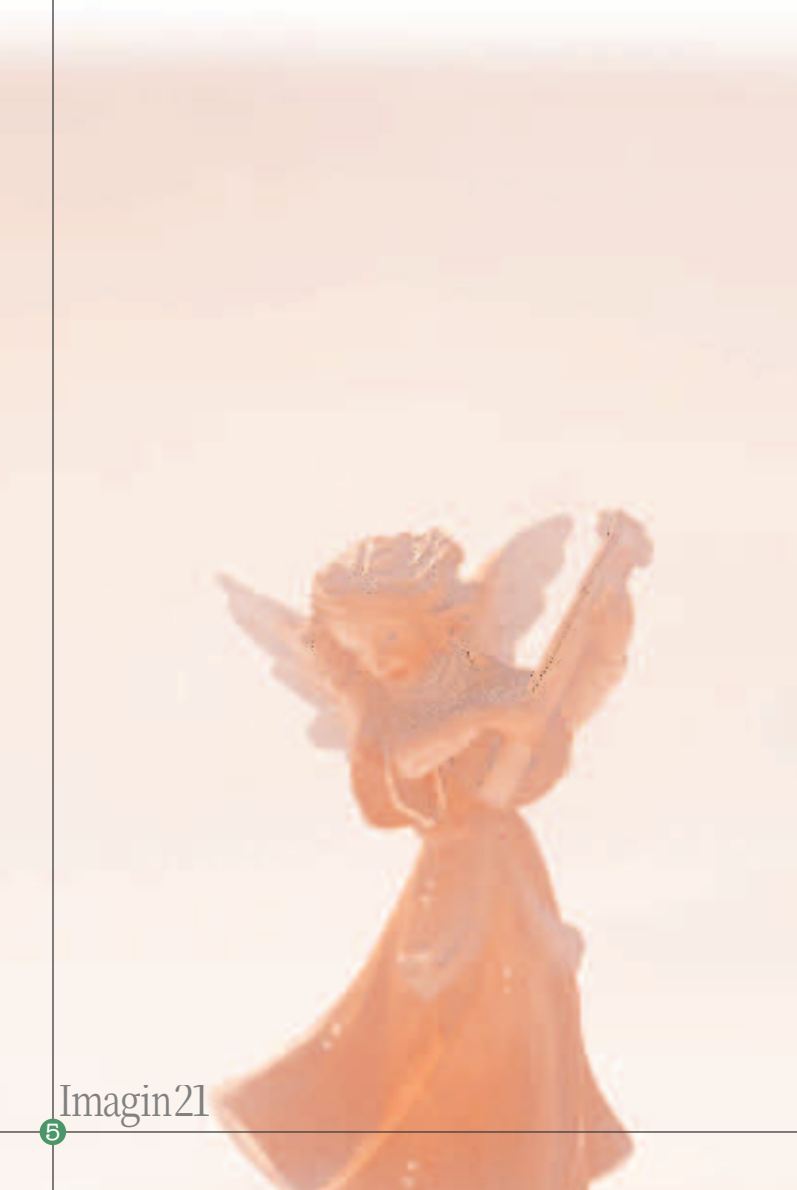
さて、この辺でもう一度念のため後藤ミゲルのことを『日本キリスト教歴史大事典』より、抽いてみよう。「後藤宗印　生年不詳―一六二七・一二・三一（寛永四・一一・二四）長崎頭人（とうにん）総代、キリシタン版出版者。武雄の後藤貴明の一族。惣太郎のち庄左衛門貞之。頭人としてその名が旧記に見え、九二（文禄元）年頭人総代として名護屋で秀吉に謁している。長崎銀座十人衆のひとりであり、朱印船にも従事した。キリシタンとしては一六〇〇（慶長五）年にイエズス会から委託されて邦文教書の印刷に従事した。（後略）」これをみてもわかるように、彼が単なる頭人ではなく、色々と才能を発揮していたことがわかる。したがって、印刷技術は、多才な彼の一端であったということがいえよう。それにしても、宗教と印刷という因果関係は、グーデンベルクの「十五行聖書」はもとより、わが国においても「五山文学」の誕生には少なからず印刷文化が寄与していることはいうまでもない。

一方、後藤ミゲルのラテン語の詩を印刷した税所ミゲルとはどういう人物だったのだろうか。いま、それを同書より抽いてみることにする。「ミゲル・サイショの名は実は一六二一年のマニラ版教義書の表題頁にその印刷者の一人として記載されているだけではない。一九二六年の『新小説』南蛮紅毛号で後藤ミゲルのラテン語の詩に言及した石田幹之助氏は、同じ文章において、このマニラ版教義書のほかにもう一種のフィリピン刊行の書籍を紹介している。」

印刷に従事するということは少なくとも手先が器用でなければならないことはいうまでもないが、それだけではなしに、税所ミゲルもまた、ラテン語ができたと思われるが、それは後藤ミゲルと同等のものかどうかはわからない。ところで、さきほどの石田幹之助氏の同書には「元和年間に呂宋（ルソン）の或る地、――少くもマニラとその近くのバコロルとで、ミゲル・サイショという一日本人が、この島の土人アントニオ・ダンバというものと組んでアグスチーノ派御用の印刷屋兼出版屋をやっていたことがあります。やっていたことがありますと書くと、いかにも世間公知のことのようですが、実はこのことは彼がダンバと共同で出版した書物がたった二種、――而もそれは孰れも稀覯のものでありますが、それが幸い残っていた為にそんな男もあったのかということがやっと分る位なので、今迄一向そんな話が伝えられていなかったのも無理はないのであります。（後略）」とのべられているが、何ともサイショ・ミゲルという男は、変り者であったかということだ。仮りに、長崎あたりでラテン語の教義書を印刷したというならわかる。それも、何を好んで異国のマニラで、しかも現住民のダンバと組んで印刷屋を始めたというのだから、駭きを通り越している。

しかし、それだからこそ、彼らが共同で出版した二種の書物が、今日では稀覯の印刷物になっているのである。

たかが印刷物とは、ゆめゆめ思うなかれ。そうすると、一枚の印刷物とはいえ、もしかして世界の歴史を変えるものを持っているかもしれない。いみじくも印刷業はそういう尊い使命を持っているのだが、そのことに気がついている人は、甚だ少ないと思う。アメリカの開拓詩人といわれているウォルト・ホイットマンも、情熱あふれる印刷者であったことを、どれだけの人が知っているだろうか。



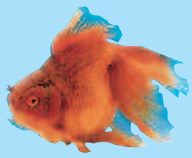
金魚が泳ぐ城下町

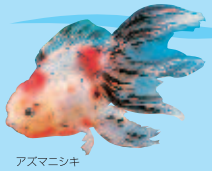
奈良県 大和郡山市

スイホウガン
水泡眼

コメット

トサキン
土佐金


チャキン
茶金


アズマニシキ
東錦

ランチュウ
蘭鋳

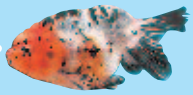
デメキン
出目金

チョウテンガン
頂天眼

タンチョウ
丹頂

パールスケール

シュブンキン
朱文金


エドニシキ
江戸錦

「大和郡山市といえば金魚」、
「金魚といえば大和郡山市」!!

大和郡山市は金魚の町として有名です。
毎年、８月には全国金魚すくい大会が行われているほどで、
全国的にも認知されてきました。
さて、今回は大和郡山市の金魚について、紹介します。

金魚の歴史

金魚はフナが変異したものと言われています。

今から約二〇〇〇年前、中国でフナの中から赤色のものが発見され、これを原種として変異や交配をくりかえし、今日の金魚に至っています。

日本へは一五〇二年（室町時代中頃）に中国から渡来したと伝えられています。

その当時は貴族や富豪の愛玩具として飼われていて、庶民の間で流行したのは明治時代だと言われています。

大和郡山市と金魚

大和郡山市の金魚の始まりは、一七二四年（享保九年）に柳澤吉里候が甲斐の国（現山梨県甲府市）から大和郡山に入部した時だと言われています。（大和郡山市は甲府市と平成四年に姉妹都市として締結しています。）

その後、幕末に藩士の副業として、明治維新後は職禄を失った藩士や農家の副業として養殖が盛んに行われるようになりました。

最後の藩主である柳澤保申候のおしみない援助に加え、水質、水利に恵まれた農業用溜池がたくさんあること、溜池に発生する浮遊生物が金魚の稚魚の餌に適していたことなど、自然条件も備わっていて、養殖業が発達しました。

近年は、都市化に伴って、生産量は減少しているものの、年間八千万匹の金魚が生産されており、全国四十％のシェアを占めています。

中でも私たちが普段よく目にする金魚すくい用の和金（写真左上）の養殖が特に盛んに行われています。

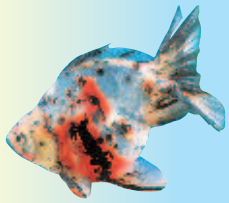
また、それ以外にも、新品種の開発にも力を入れている養魚場もあります。

まちかど

街角金魚図鑑

大和郡山の町を歩くと、
かわいらしい金魚をモチーフとしたものであふれています。
その一部を紹介します。

ワキン
和金



キャリコ

リュウキン
琉金

オランダシシガシラ
和蘭陀獅子頭

ガードレール
遠くから見るとよりきれいです
交通安全には注意！

バス停
コミュニティーバス
「元気城下町号」の
バス停です

大和郡山市　副章
副章にも金魚を用いています

マンホール
銅色に金魚の赤が映えて、
なんとも美しい…

案内標識
城下町の名残である格子状の町並みも
これさえあれば迷いません

上の写真は、大和郡山市で養殖されている金魚を代表する品種です。こんなにもたくさんの品種があるのです。みなさんはどれだけご存知ですか？

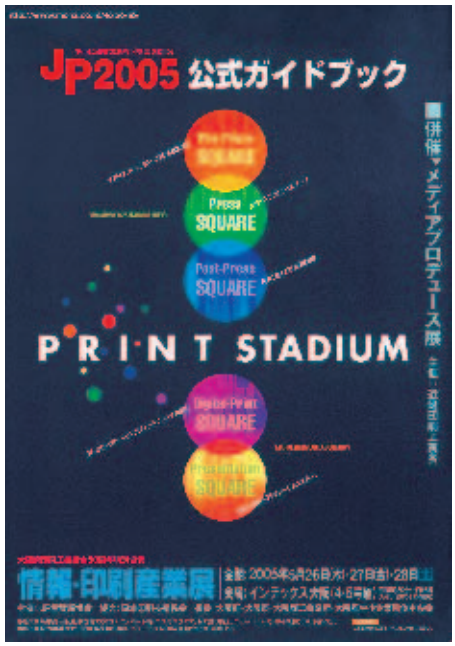
写真提供…大木紀男氏

協力：大和郡山市農業政策課

中小印刷業のあるべき姿を問う！

JP2005

特集 情報・印刷産業展を行く



印刷産業の将来を垣間見ることができるか!?

期待と希望を胸に、「JP2005」を見に行ってまいりました。

関西地区最大の印刷機材展、「JP2005情報・印刷産業展」。

五月二十六日㈭から二十八日㈯までの三日間、インテックス大阪を舞台に、各社それぞれが下記SUQAREを構成しながら、各々のブースを独自のカラーに染めています。

開催コンセプト

（公式ガイドブックより抜粋）

「JP2005情報・印刷産業展」のブース構成は、印刷経営におけるワークフローを都市行政のライフラインに模して展開します。ワークフローを構成するプリプレス、プレス、ポストプレス、周辺機資材、デジタルプレス、プレゼンテーション（企業交流）などの各機能を、都市を構成する街区「Square」に符合させ、都市機能の複雑な関連動作と制御機能を印刷ワークフロー上の標準化と自動化機能に照らし合わせ、その機能連鎖を六つの印刷「Square」の中で検証できるように組み立てていきます。

これからの印刷企業が必要とする生産および経営上のシステム機能と、機能獲得のために解決していかなければならない各種課題を、仮想都市「JP」の六つの印刷「Square」の中でシュミレーションできるようにしていこうと計画しています。

プリプレス、プレス、ポストプレス、周辺機資材、デジタルプレス、プレゼンテーション（企業交流）の6Squareには、それぞれの課題が表示されます。

●プリプレスSUQARE

①最新デジタルテクノロジーに基づくワークフローの実際
②ワークフローの標準化と拡大・発展技術
③デジタル時代の画像入力と出力までの色標準化技術
④基準出しのための各種技術とシステム

●プレスSUQARE

①色再現性のための自動化機構
②生産性向上のための自動化装置
③JDF・MIS対応システムの現状
④多機能化と新需要開拓に応えて

●ポストプレスSUQARE

①環境対応システム
②工程短縮と効率化機構
③労働安全対策
④CIP4対応への現状システム

●デジタルプリントSUQARE

①小ロット・カラー印刷としてのデジタルカラーコピー機
②DDCPで利用されるインクジェットプリンターによるCMS効果
③オンデマンドプリントで活躍する機能比較
④ネットワーク化による新たな付加価値創出

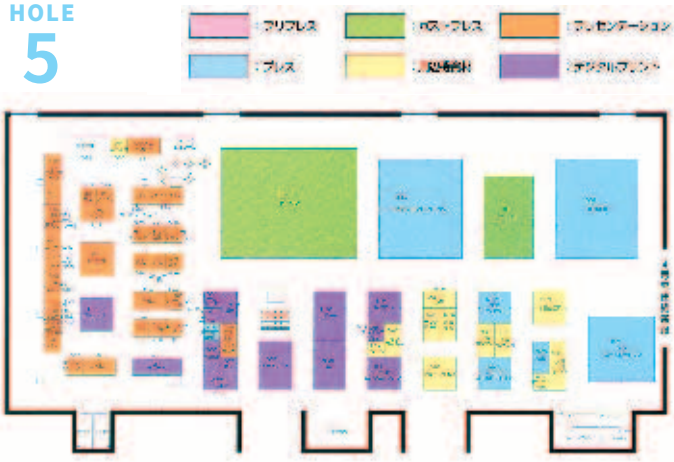
●プレゼンテーションSUQARE

①新素材、新技術の開発による利用者探し
②応用展開技術および製品のアプローチと共同利用および発注者探し
③営業領域拡大のためのネットワーク構築
④業務拡大のための提携相手探し

●周辺機資材SUQARE

HOLE 4

HOLE 5



今回JP展には九十六社が集い、インテックス大阪四号館・五号館はかなりの活気に満ちていました。巨大な印刷機や製本機、インクジェットプリンターで出力した新素材、そしてプレゼンテーション。会場を訪れた我々も、思わず感嘆のため息をついてしまうほど。

開催コンセプトや各SUQAREの説明にある通り、今回の主なテーマとして、

色管理
省人力・自動化
小ロット多品種化への対応

の三つが挙げられます。

色管理に関しては、原稿からパソコンの画面上の色、実際の印刷の色まで、ソフトウェアによってカラー管理をし、安定した色再現が行われるようにする、というものです。現在のような様々な媒介を通して「色」を把握できるようになった我々にとって、何が〝正しい色〟なのかを判断する必要が生じてきているのです。

省人力・自動化に関しては、コスト削減と同時に、やはり安定性というものが過去にも増して求められてきています。

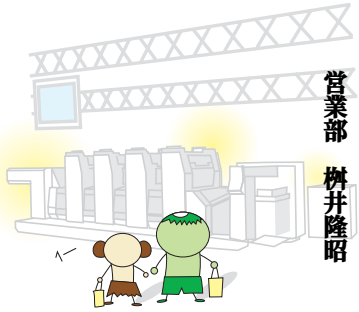
そして小ロット多品種化への対応。現在は誰しもがパソコンを持ち、プリンターを使って個々に印刷物を作成できる時代です。一枚一枚の情報に変化を持たせることができる、いわば可変印刷の時代です。少ないロットでも安く上げる、内容差し替えにもフレキシブルに対応できることが、これからの時代に必要とされています。

今回のJP展については、真新しい技術がフューチャーされている、というより、最新の機種を活用して、どのように上記のような目的に沿った印刷物をお客様に提供できるか、ということに各社重点を置いていたように思われます。

印刷業界において、機種の進化というものに関して言えば、実際行き着くところまで来ている感は否めません。時代はハードよりもソフト、機能よりもサービスを求めてきているようです。品質・価格は当たり前。その当然の条件をクリアして、なおかつその先をどうお客様に提供するのか。弊社のみならず、これからの印刷業界全般の課題でもあります。あらためて、様々なことを提示され、考えさせられるJP展でした。

「そういえば、印刷の機械なんて見たことないなぁ。」「印刷なんて、プリンターの大きいので刷っちゃうんでしょ。」と思われている方、一度JP展で機材を目の当たりにしてみてはいかがですか？想像以上に、壮大ですよ!?

営業部　桝井隆昭



JP2005情報印刷産業展で
いただいたサンプルの一部

地域とボランティア

NPO法人 キャリアサポートセンター奈良

昨今、深刻化する就労問題。価値観の多様化に伴い、就労への考え方も変わりつつある現代。中高年の就労問題、フリーター、ニートの増加、それら諸問題を、ボランティアの枠を超えてサポートする同センターへ今回取材させていただきました。

山田政利氏（理事長）へインタビュー

昨年秋の設立ですね

私が、奈良大学の就職部長の時、インターンシップや学生の就職問題に取り組んでいた時期です。その折り、就職問題の厳しさ、支援活動の必要性等を感じ、企業や学識者の賛同を得たことがきっかけです。その後は、幅広く学生、中高年等の就職問題等に取り組んでいます。

就労問題は社会現象になっていますが？

会社でのリストラ、就職差別、社会がかかえる問題も多種多様化しています。そういう問題を、ボランティアの域をこえて、行政・有識者等といっしょに取り組んでいくことで解決のいとぐちを作りたいと思っています。

これから同センターが特に取り組んでいきたいことなどお聞かせ下さい。

最近社会問題となっているニート（若年無業者）についてこれから特に取り組んでいきたいと考えています。ニートの数は、年々増加し、日本では現在八十五万人近くの人がこれに属しているとも言われています。

同センターも、何か具体的な行動をとられているのですか？

十八年度には県（学校教育課）と協働で「高校のインターンシップの推進」をテーマとし、ニート対策の一環として取り組みます。

地域の人材育成につながるようなインターンシッププログラムの開発を学校側・企業側と協働で行います。

今後の具体的な活動計画はありますか？

キャリアアドバイザーによる個別カウンセリングやセミナーの開催、企業の採用のお手伝い等を行います。

同センターの今後について抱負などお聞かせ下さい。

就労に対する価値観が変わり、自立的に行動する人は、おのずと道をひらいてゆくのですが、特に若年層の自ら行動を起さない大人になりきれていない若者の指導や、カウンセリング等のサポートなどを行ない、かかえる問題をクリアーし同センターが少しでも社会の一翼を担うことを願っています。

又、同センターの山田孝一（事務局長・写真左）氏も私のよき理解者であり、依頼者から就職に関する問題等なんでも相談にのってもらえることで、より、同センターの活動の幅もひろくなると思っています。

私個人としてはいつの時代も若い人にもっと志高く自分の信念を貫き通すぐらいの気概をもって前向きに人生を歩んでほしいと思っています。

取材　営業推進部　植田　國義

主とする事業

就職サポート

学生・第二新卒・若年層及び一般未就労者の就職相談・支援

採用サポート

企業の採用支援・相談

人事・労務サポート

人事・労務の各種相談・支援

離・転職サポート

今の仕事が合わない。就職したが当初の思い（約束）と違った。リストラされた（されそう）。等の各種相談及び再就職支援

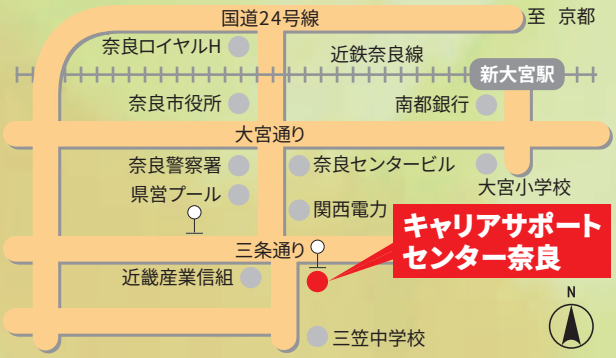
その他の事業

社員教育サポート
スキルアップサポート
インターンシップ（短期就労体験）
講習会、研修会の開催
個別カウンセリング

「NPO法人キャリアサポートセンター奈良」活動の変遷

平成16年10月29日	奈良県知事認証
平成16年11月１日	法人設立
平成17年３月22日	講師派遣 奈良市立都跡中学校１年生対象「職業理解講座」 ※依頼者：雇用・能力開発機構「私のしごと館」
平成17年５月11日～12日	第一回セミナー開催（若年者向け）「就職・再就職支援塾」
平成17年６月13日～14日	第二回セミナー開催（若年者向け）「就職・再就職支援塾」
平成17年７月７日	講師派遣 橿原市立畝傍中学校２年生対象「職場体験事前学習」
平成17年９月～10月	公共職業安定所の職員及び相談員対象スキルアップを目指し研修を実施
平成18年４月１日～19年３月31日	県（学校教育課）との協働事業 高校キャリア教育充実事業

ACCESS GUIDE



近鉄奈良線「新大宮」駅下車徒歩12分奈良交通バスのりば（新大宮駅南口）
行き先（四条大路南町）約4分　「新大宮駅前」→「三笠中学校前」

奈良県知事認証特定非営利活動法人
ＮＰＯ法人キャリアサポートセンター奈良
〒630-8125奈良市三条川西町1番4号
TEL/FAX：（0742）36-5320
IP電話（OCN）：（050）3465-9313
E-mail:npo-cscnara@celery.ocn.ne.jp
URL:http://www16.ocn.ne.jp/~cscnara/

主　目　的

①就職活動中の大学・短期大学及び専門学校生や卒業間際の未内定者、新卒無業者、第二新卒、就職ミスマッチ者等の中で、自らの意思で就職又は離・転職を希望する者に対して、個人を尊重し、満足のいく就職ができるように、スキルアップ支援と適職マッチング支援を行う。
②若年労働者の退職者（予定者を含む）に対して、カウンセリングやセミナーを通じて適職発見、再就職支援を行う。
③求人企業の人材ニーズにベストマッチングした形での採用支援を行う。

事 業 内 容

（定款抜粋）
(1)特定非営利活動に係る事業
①若年層及び一般未就労者の就職支援事業
②企業の人事・労務に関する各種相談及び支援事業
③求職者と企業、求職者と行政、企業と行政の情報交流事業
(2)収益事業
①通信技術・情報発信の推進事業
②書籍・情報誌等の構成・印刷・出版・販売事業
③広告宣伝等の代理店事業
④人材確保及び育成のための推進コンサルティング事業
⑤特定非営利活動法人の設立と運営支援事業

ご支援のお願い

特定非営利活動（NPO）法人は常に自活努力を行うことが原則であり、私どもも収益事業の確立を模索しております。
日本では、特定非営利活動（NPO）法人に対する事業環境の整備や公的助成制度が未だ確立されず、現状では会員の会費や任意の寄付に負うところが大であります。
就職環境の整備及び支援という当法人の趣旨にご賛同いただける皆様、是非ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

①正会員
この法人の事業に賛同し、利用するために入会する法人・団体及び個人
○入会金　１口　10,000円
○年会費　１口　5,000円
入会金は１口以上何口でも可。法人・団体の年会費は３口以上

②賛助会員
この法人の目的に賛同し、その事業を賛助する法人・団体及び個人
○１口　2,000円
１口以上何口でも可。但し、法人・団体は５口以上

■振込口座（郵便局）
郵便振替口座『00900-9-278360』
加入者名：NPO法人キャリアサポートセンター奈良
払込手数料：通常払込料金加入者負担
郵便振替用紙に住所、氏名、電話番号、金額をご記入のうえ、郵便局でお手続きください。

■振込口座（銀行）
南都銀行（0162）大宮支店（030）
口座番号：普通預金　0586701
口座名義：特定非営利活動法人キャリアサポートセンター奈良
フリガナ:トクヒキャリアサポートセンターナラ
※振込手数料のご負担をお願いします。

※ニート　NEET（Not in education, employment, or Training）。学校に行かず、仕事もせず、職業訓練もしていない若者を指す。1990年代後半のイギリスで呼ばれたのが最初。近年、非正規雇用を増やす企業の雇用形態や不況による就職難、いわゆる「ひきこもり」の増加などを原因に日本でも増えている。平成15年で前年比４万人増の52万人にのぼる、と十六年版「労働経済白書」は伝えている。

奈良晒

―株式会社 中川政七商店―

起源及び成立

奈良晒は、近世奈良を中心として生産された麻織物です。

その起源は明らかではありませんが、『多聞院日記』（天文一八年―一五四九―）に晒関係の記事が見られ、室町時代には、社寺の注文により生産が行われていたようです。

その後、江戸時代の初期には、幕府の保護統制策により、奈良晒は尺幅検査の上、布の端に「南都改」の朱印を押したもののみ売買を認められました。幕府の御用品として認められたことが、奈良晒の名声を全国的にし、晒業の発展に大きな役割を果たしました。

久しく続いた戦乱が収束し、安定した社会の中で、武家や町民を対象とした奢侈品として、裃・帷子・幕地や夏の衣料として用いられ、次第に奈良晒の生産は増大していきました。

発展

天文七年（一五三八）には、すでに晒屋の記録があらわれますが、慶長年間末には晒屋仲間が出来ていて、寛永十四年（一六三七）の『南都曝御改帳』では、すでに晒商人として三六〇人の名が記されるまでになっています。

明暦三年（一六五七）から、先の尺幅検査に加えて、晒す前の生地についても検査が始められ、判場が設置され、布の織初めに「極」、織留めに「奈良晒惣年寄」の黒印を押し、これのみ晒してよいことになりました。そして、翌年の万治元年（一六五八）には三二万疋の生産が続けられました。

この頃の様子を「当町十の物九つは布一色にて渡世仕り候。妻子は布かせぎ致し、下々の駕篭かき日用取り申す者共の女には、布おらせ或は、苧うみ渡世仕り候事」と伝えるものや、井原西鶴の『世間胸算用』の中にも、その盛業ぶりが紹介されています。

都市における手工業として出発した奈良晒も次第に農村へも広がり、農家の婦女子の農閑期における家内労働として、苧うみや布織りが行われ、これを基に「田舎中買」「在中買」と称される在郷の商人が成長し、この中から「在方詰至」等といわれる農民の織元も現れてきました。

衰退

享保の頃より、越後縮近江上布などの他国布の抬頭により、奈良晒が独占的地位を失い、また、粗悪品が横行したこともあって衰退にむかい、幕末には数万疋まで減少しています。

その上、明治維新の武家の没落により、最大の消費地を失い奈良晒の衰退は決定的となりました。

現在

昭和五四年二月、『奈良晒の紡織技術』を奈良県指定無形文化財に指定され、その後奈良晒保存会が発足。保存会には中川政七商店様・坂西様・岡井様のグループが認定されました。保存要件には、

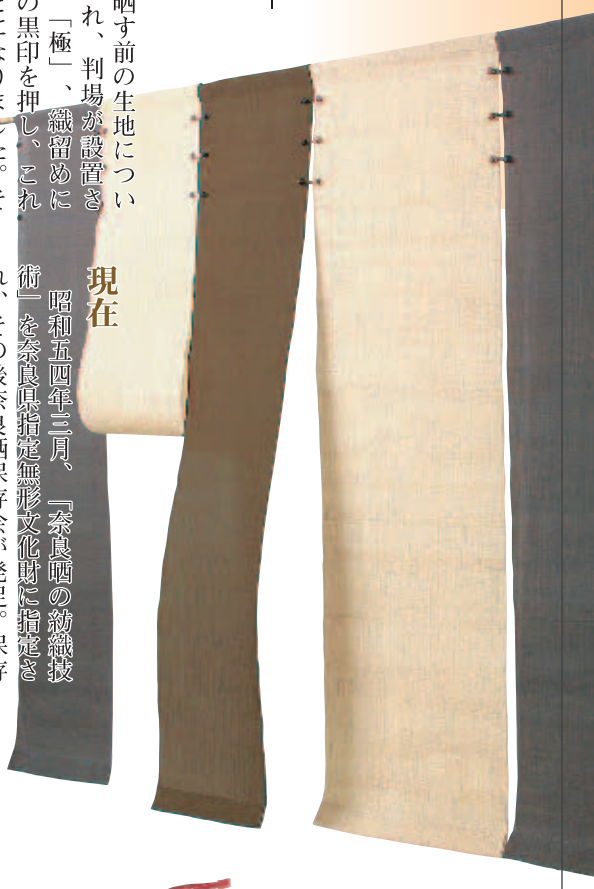
一、苧麻又は大麻をすべて手紡ぎした糸を使用すること

二、手織りであること

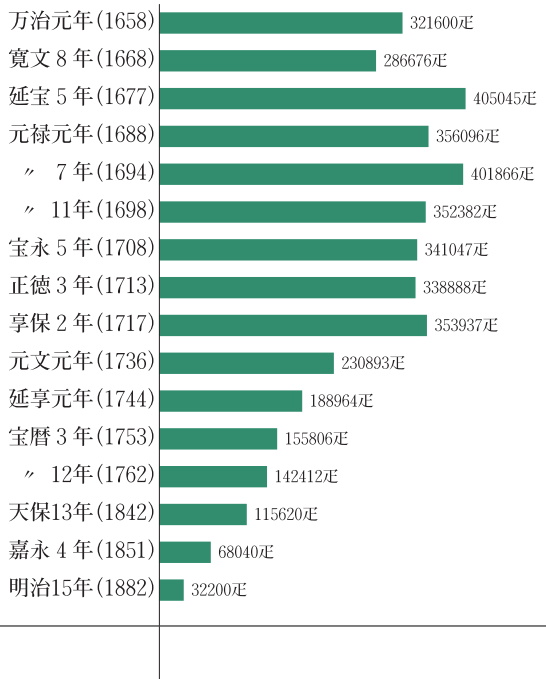
の二点です。保存会の他にも奈良晒の伝承教室などがそれぞれにがんばっておられます。

現在奈良晒は茶道の〝茶巾〟ではよく知られておりますが、その他の分野では、名実ともに衰退しようとしているようです。そこで、保存会の一グループでもある中川政七商店様は、奈良晒の伝統をふまえ、『遊 中川』として現代生活にも役に立つことの出来る様々な麻製品（のれん・タペストリー・コースター・袋類）を開発し、全国展開されておられます。

なかなか日常生活で我々が触れることの少ない伝統工芸品・奈良晒ですが、形を変え様々な商品に顔を変えています。強く耐久性があるなどメリットも沢山ありますし、ぜひ一度手に取ってみてください。古来から伝わる気品で清楚な肌触りを実感してみてください。



奈良晒生産高



奈良晒の製法順序と工程

製法順序

奈良晒の生産工程は大きく苧うみ・織布・晒の三工程に分けられる。

現在、原料の大麻（青芋（おうそ））を績んで糸とし（苧うみ）、撚りをかけて経糸（綛（かせ））をつくり、これを度数に応じて整経し、糊づけ、もじり入れ等を行って機にかける。一方、へそ巻きした緯（よこ）糸を杼に入れ、機にかけた経糸の綾の間に杼を通して織り上げる。織り上がった麻布（生平（きびら））を、数度の晒工程を経て真白く晒上げて仕上げる。

原料水づけ
シゴキ
苧うみ
よりかけ
かせかけ
ワクかけ
へイる（整経）
アリオサ通し
チキリ巻き
糊づけ（サイメン取り）
モジリ通し（綜入れ）
オサ通し
機かけ
へそ巻き
杼に入れる
織り
晒作業

製法工程

苧うみ

整経

へそ巻

織り

命が吹き込まれる

紙ができ

KYODO SEIHAN PRINTING

KSP

R100 本誌は100%古紙配合の再生紙を使用しています。